

欲求追求型自動車社会に 求められる今後の課題

橋山禮治郎

帝京平成大学教授

Reijiro HASHIYAMA

Professor, Teikyo Heisei University

世の中のすべての問題は人間の欲求拡大とそれから派生する政治的、経済的、社会的、文化的問題に対する対応策の相剋である。人権、食糧難、テロリズム、医療、年金、経済摩擦、行財政改革、規制緩和、不良債権処理、整備新幹線ばかり。交通問題もその代表的イシューである。多くの人間がより高レベルの移動の自由(円滑性、快適性、高速性、安全性、多様性、経済性等)を求める結果が混雑、交通渋滞、事故による人命喪失、エネルギーの大量消費、騒音、環境破壊、コスト上昇、財政支出増等をもたらしている。個人の欲求を自由放任にしておいてもやがて社会的調和が達成されるというアダム・スミスの考えが、こと交通問題に関する限り妥当しないところに対応策の難しさがある。技術進歩、インフラ整備、需要管理(有料化、ピークロード料金、駐車規制等)、公共空間の効率的利用(立体化、地下化等)など諸々の英知でこれまで対応してきたが、根本的なブレークスルーは実現できていないばかりか、今後の世界人口の増加を考えれば問題の深刻さは益々増大するものと認識すべきであろう。

さてここでは自動車交通に限定しよう。自動車に強い関心を持ち続けてきた筆者としては、これまでの政府、自動車メーカー、関連産業、利用者の対応については高く評価しつつも、敢えて批判的見解を述べ諸賢の判断を仰ぎたい。

筆者の建設的批判は一言で言えば、これまでの主として自動車メーカー側による技術開発の方向にしる、政府の公共政策にしる、利用者(ドライバー)の利便性、満足度を如何に高めるかに重点が置かれ、自動車交通のもたらす外部環境に対する負のインパクト(大気汚染、騒音、駐車妨害、死亡事故、自然破壊等)を如何に極小化するかという認識がまだまだ不十分ではないかという点である。自動車の利用者にとっての快適満足性、操縦性、安全性、経済性、静寂性等を追求してメーカー各社は競ってエンジンの改良、エアコンや音響装置の高級化、リクライニング、ABS、エアバック、ナビゲーション等次々と技術進歩を実現してきたが、これらはいずれも利用者自身にとっての内部利益の追求に対応したもので、第三者を含む外部環境に対する負の社会的効果を軽減する観点から進められたものではない。最近研究開発が進められているITSにしてもゲート通過の円滑化、追突防止、自動走行等を目的としている。その一方で緊急課題であるトラックの排気ガスのクリーン化が遅々としている。

最近わが国自動車メーカーが真剣に取り組んでいる更なる低燃費化や低公害化(EV化、ハイブリッド化)は確かに明るい材料で、21世紀の自動車社会と自動車産業に大きな変化をもたらすとともに、地球環境問題に対して大きく寄与する可能性もあろう。最後に再度強調したい。これから益々進展すると思われる自動車社会にとって真剣に求められるべきは、利用者の満足度極大化に資する至上的技術進歩にも増して、外部環境に対する負荷軽減と市民社会との調和を達成していくための社会的技術進歩の追求であろう。

原稿受理 1997年2月25日